高尾山報 令和6年4月号 毎月1回発行 通巻第723号

高尾山報

令和6年4月号

春山を開く高尾山火渡り祭厳修

三月十日　於・自動車祈祷殿大広場

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(142)

能登言葉

親しまれっっ
花の旅

（高浜虚子）

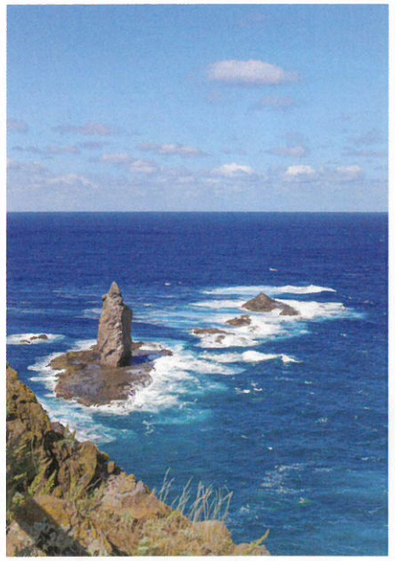
この句は、俳人高浜虚子（一八七四～一九五九）が、昭和二十四年（一九四九）四月の奥能登の旅に際して詠ったものです。聞き慣れない能登の言葉に親しみを覚えつつ、地元の方々との温かな交流を育んだ花盛りの旅だったのでしょう。

先日は、今年元旦の能登半島地震によって打撃を受けた輪島朝市（石川県輪島市）が、三ケ月ぶりに金沢市内で出張開催されたとの嬉しいニュースがありました。元気な掛け声が響き渡る会場では、「あんがとう」（ありがとう）の能登言葉も、威勢良く飛び交っていたでしょうか。本格的な再開に向かっての門出を心より応援するとともに、いつの日か虚子のように、気持ちの良い能登の風を直に感じることができたならと思います。

さて先月号では、弘法大師空海（七七四～八三五）が発見したと伝わる名勝「見附島」（石川県珠洲市）について書きました。珠洲地方は昔から修行の地でもあったらしく、平安時代の流行歌を集めた『梁塵秘抄』（僧歌）には、「**我等が修行に出でし時、珠洲の岬をかい回り、打ち廻り、振り棄てて、単身越路の旅に出でて、足打せしこそあはれなりしか**」（私が修行に出たとき、珠洲の岬をめぐりめぐって、しまいには岬を振り捨てて、一人で越路の旅に出て、足を痛めたのは辛かったよ）と歌われています。「珠洲」は、仏さまを拝むときに用いる「数珠」に音が通じているとの指摘もあります（「評釈」「新全集」など）。多くの僧侶が「山林斗藪」（山野で不自由に堪えながら仏道修行に励むこと）を行ってきた聖地でもあるのでしょう。

また歌に見える「越路」は、五畿七道の一つである「北陸道」（古称「北陸の道」）を指します。先月号では、佐渡と能登を結ぶ「大師信仰の航路」について述べましたが、若狭（今の福井県西部）から越後（今の新潟県）、佐渡までをつなぐ海沿いの道もまた、物流を支えた道であるとともに、篤い信仰に根ざした「修行の道」であったことが想像されます。

こうした能登と佐渡をめぐっては、例えば能登の鉄掘り集団の頭（長）が佐渡に渡って金を採取する説話も残されています（『今昔物語集』『宇治拾遺物語』）。古くから文物の交流も盛んな両国だったのでしょう。



海路もまた弘法大師の伝承が残る修行の道であった

能登と同様に、佐渡にも多くの弘法大師説話が残されています。お大師さまが唐から投じた「三杵」（独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵）のうちの独鈷杵が留まったと伝わる小比叡山蓮華峰寺をはじめ、お大師さま開基（創建）のお寺がいくつも遍在している他、自らが彫刻なされたという洞窟内の摩崖仏も残されています（岩屋山石窟）。

それらの伝承の中から、今回は佐渡市後尾にある「影ノ神」（影の神）という巨大な岩を取り上げてみたいと思います。佐渡の歴史書『佐渡風土記』（寛延三年〔一七五〇〕頃）には次のように語り継がれています。

後尾村にある影ノ神（陰ノ神）の開基については詳しいことは分かっていません。海中に島があって、北を背にして南側に洞穴があります。影ノ神をお参りする者は、舟に乗って中に入っていくしか方法がありません。この岩屋は弘法大師空海が秘法（密教の修法）を行った場所と伝えられています。それは修行に励まれた壇上の跡を見ても明らかです。

島の上にはイブ木（ヒ

総本山智積院傳法灌頂
開白法要当山貫首臨席

三月六日（水）

傳法灌頂開白法要に参列された諸大徳の皆様

真言宗智山派総本山智積院に於いて、三月六日に布施浄慧化主御重任記念傳法両大会　傳法灌頂開白法要が執り行われ、総裁　大本山成田山新勝寺岸田照泰貫首、副総裁　大本山川崎大師平間寺藤田隆乗貫首と共に、副総裁として当山貫首が臨席しました。

傳法灌頂とは、真言宗で継承されてきた秘法を伝え、受け継ぐための儀式です。

ノキ科の「イブキ」か）が生えています。この木を切ると、たちまちに悪風（海上で荒れる暴風）が起こると言われていることから、村人は伐採を固く禁じてきました。

「影ノ神」の名は、一説では「鹿毛の霊」とも称されます。その理由は、この近くの村里で怪異（怪しい事柄）があると「鹿毛の駒」（鹿の毛のように茶褐色の馬）が現れて、人間に姿を変えたからとか。今に至るまで不思議な所なのです。

（『佐渡風土記』）

干潮時には歩いて渡れるという影ノ神ですが、洞穴の奥には石仏が安置されており、かつて地元の後尾地区では旧暦六月十五日を「影ノ神祭」としてお赤飯を炊く風習があったそうです（『日本歴史地名大系』参照）。お大師さまのご誕生をお祝いする行事でもあったのでしょう。

「影ノ神」という謎めいた名称について、ここでは「鹿毛の霊」説が挙げられていますが、本来は佐渡最高峰の金北山山頂の影が、元日の朝日に照らされて岩に映るところから名付けられたとか。金北山は、金剛山、檀特山とともに「三山駆け」が行われていた修験道の修行場でもあります。この一帯は真言宗と深い関わりがあることから、お大師さまの信仰が今に息づく霊域と言えるでしょう。

波の上に
うつる夕日の
影はあれど
遠つ小島は
色くれにけり

（『玉葉集』京極為兼）

（波の上に映っている夕方の日の光は残っているけれど、遠くの小島はすっかり薄暗くなっているよ）

修行に明け暮れていたお大師さまは、金北山に輝く朝日を浴びて、どのような夕日を眺めたのでしょう。もしかすると、能登のずっと先にある唐の都や西域に、思いを馳せていたのかもしれません。

（栃木北部教区普濟寺）

春彼岸先師墓地参り

三月二十日（水）

国土安穏・被災地早期復興
高尾山火渡り祭
三月十日　於・自動車祈祷殿大広場

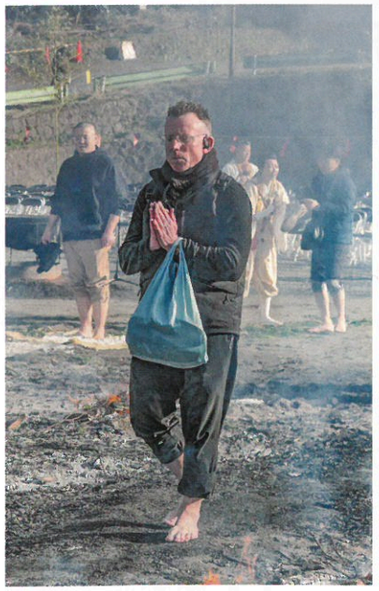
浄火を素足で踏みしめる、火生三昧「火渡りの儀」を行う佐藤貫首

人々の願いを御本尊様へ届けるため撫で木を火中に投ずる山伏

三月十日、恒例の「高尾山火渡り祭」が自動車祈祷殿大広場において、国土安穏・被災地早期復興を願い佐藤貫首大祇師のもと厳修されました。

道場内に盛大に火焔が立ち上ると、御信徒皆様の願いを込められた「撫で木」が投入され、浄煙となり、天へと昇りました。

続く火渡り行の「火生三昧」では、御本尊様の智慧の炎である浄火を素足で踏みしめ、身体健全・身上安全・災厄消除を祈念し、ご来場頂いた大勢の方々が山伏に続いて浄火を渡り、諸願成就を祈願されました。


海外からも大勢の方が参加されました

山伏さんと一緒なら怖くないよ

梵天みこしと共に不道院より道場まで練行する

火を渡り佐藤貫首より御加持を授かる

道場内四方を浄める宝弓の儀

柴燈護摩の壇木を伐り出す神斧の儀

燃え盛る柴燈護摩壇を囲む山伏たちの読経は響き渡っていく

高尾山年代記 52

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十八世秀神10　日護摩講の加入者

文化六年（一八〇九）成立の「江戸田舎日護摩講中元帳」（以下「元帳」と略す）という護摩檀家帳は、政治・経済の波がうず巻く現実世界とパラレルであった信仰世界が凝縮された小宇宙とも形容できる様相が極めて印象的である。その具体相を数回に分けて紹介したい。

近隣の村々

講加入者の一割強を占める高尾山最寄りの村においては、上長房村は家数一三五軒の内五九名（「元帳」作成当初の数字、以下同じ）、上椚田村家数三三四軒の内七九名の護摩檀家が数えられる。定期的な施主となるには護摩料を納める相応の財力も要するであろうから、一村全員とはゆかないまでも、相当数の人々が檀家となっていた。加入者全体の約四分の一を占める現八王子市域と神奈川県相模原市北西部の農村では、薬王院の使者から札を受け取る一村一～二名がさらに村内の五、六名、多いところでは二〇名を超える人々に札を取次ぐといった様子である。

それ以遠の地方在住者は距離をおいての取次を受ける檀家となるが、取次関係と商品流通の関わりを前号で提起した。そもそも、高尾山が信仰圏とする関東西部から甲斐国（山梨県）にかけては、養蚕と生糸・絹織物生産が盛んな場所で、当然ながらその関わりの人々が信徒となり、その生業を保証することも自明だが、その実態はどうだったか？

生糸・絹取引の関係者

八王子宿を除く多摩郡西部では、日護摩講加入に主体性が高いと目される檀家一〇人に一人が織物商と判明したが、日護摩講の拡張傾向に織物流通に負う特殊性があるとまでは言いがたい。しかし、八王子周辺の織物商による天保一〇年（一八三九）の規定証文に連名した四六名の内檀家は二一名、八王子宿在住者に限ると一二名中五名と比率が上がる。同八年の史料に見える仲間肝煎（＝世話役）五名中三名が檀家であることからすると、やはり織物流通の関係者に対する高尾山信仰の影響力の少なからぬものを感じる。織物市の世話役藤野新七の西多摩方面への取次先には織物商と目される者二名を含み、商いの人間関係が高尾山信仰を共にする具体相が見える。

八王子横山宿の新藤定七が取次ぐ入間郡糀谷村（埼玉県所沢市）の新藤弥平次は、天保二年の織物商仲間議定に名があり、同郡宮寺村（同入間市）の有力織物商細渕家とも取引があった。北方の入間郡・高麗郡方面では、八王子八日市宿相模屋吉右衛門が取次ぐ所沢宿油屋徳兵衛の他、必ずしも時期を同じくしない史料からも、姓や通字註の一致により糸繭・絹の生産・取引に関わると推定し得る人々が見出され、そのネットワークが高尾山信仰とシンクロナイズしていた実態が提示できる。

八王子宿

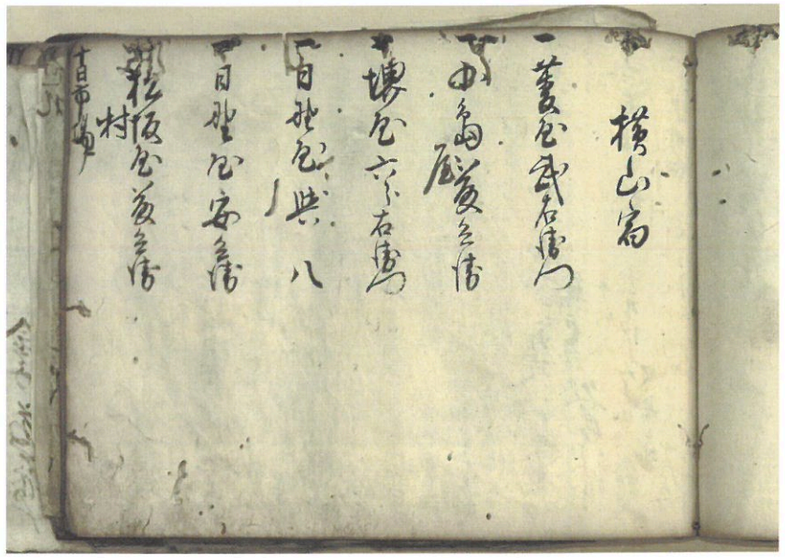
織物商の檀家比率は八王子宿在住者に高かった。同宿の檀家二〇四名は、比較する時代が少し下るが、天保一四年（一八四三）の家数一五四八軒の一割を超える。具体的な生業が判明している者に、質屋として八木宿大坂屋甚助、横山宿相模屋重蔵、同宿米屋と八幡宿加賀屋は屋号の一致を見る。質屋とは資金を融資する、後の世に言う銀行家である。横山宿の近江商人を出自とする両家も注目される。十一屋勘兵衛は酒造業を営み、上野国佐位郡境町（群馬県伊勢崎市）の十一屋利兵衛へ札を取次ぐ。近江屋権平は穀商・酒造・質屋と多角経営をおこなう者で、織物取引への関与も指摘されているが、何れも商業活動にともなう幅広い視野と人脈を持つ者だろう。十一屋・近江屋は湯島出開帳にあたって毎日供物を寄進、前出の藤野新七は修法具を寄進するなど、宿の有力者はすなわち信徒の主だったメンバーであった。

利根川水系経由

武蔵中部へは八王子方面からの取次が多いが、東部の利根川・江戸川筋では江戸から取次を受ける者があった。下総国葛飾郡西宝珠花河岸（埼

玉県春日部市）の商人清水屋藤兵衛と耕作通船舟主の村瀬栄蔵は、河岸場の持ち主である日本橋小網町の伊勢屋喜右衛門から取次を受ける。伊勢屋は「取次計」りとあり檀家ではないので、清水屋・村瀬の側が定期的な往来のある伊勢屋を札の届け先に指定したことになる。

高瀬仙右衛門が在住する上野国邑楽郡大久保村（群馬県板倉町）は河岸場ではないが利根川沿いの村で、米穀取引で財を成した祖先善兵衛直房が遺した商家の家訓（元禄二年・一六八九）が知られる。同家は代々寺社への崇敬篤く、仙右衛門は行政の立場で川俣組合四〇ケ村の大惣代だったことが判明しているが、取次を受ける日本橋小網町薪炭仲買の利根川屋太吉とは定期的な往来があったものだろう。



八王子横山宿の講加入者（護摩檀家）
法政大学多摩図書館寄託

蚕種取引

遠距離の取次関係で印象的なのは蚕種（＝蚕の卵）取引の関係である。八王子宿の糀屋は蚕種商の定宿で、取次先の陸奥国伊達郡伏黒村（福島県伊達市）小野新兵衛、同郡梁川村（同）八巻善右衛門は、万延元年（一八六〇）「蚕種銘鑑」に同姓の者があり、蚕種商いの関係であったことは間違いなかろう。上長房村駒木野宿鈴木佐次右衛門の取次先である蚕種の有力産地上野国佐位郡島村（群馬県伊勢崎市）の栗原勘兵衛・清右衛門、上長房村小名路宿広瀬宇兵衛の取次先緑埜郡水戸野村（同藤岡市）斎藤八十八も蚕種取引に関わっていた可能性が高い。斎藤の家は女流絵師香玉を輩出するなど、文芸にも通じていた。

在村文化人

当時の富裕農は農業従事者というよりは、商品作物の流通や金融取引にも関与する、言わば製造・販売の企業経営者であった。そうした人々は文化活動の交流によって生業に係わる信頼関係を醸成させていたことが指摘されており、日護摩講の有力檀家にも文芸活動をよくする人物が散見される。

草加宿（埼玉県草加市）の大川清左衛門は、江戸出開帳の折に大幟を奉納するなど、この方面で薬王院が例外的に直接札を届ける特別な存在だった。清左衛門は草加宿の草分け大川家の分家下大川の、「元帳」成立当初は七代目当主にあたる。雨声を号とし茶道・俳諧をよくした。天明二年（一七八二）、同じく講加入者である新井家より養子に入り、宿役人を務めた。

越谷宿（同越谷市）の江沢太郎兵衛は江戸の塩町溜屋久兵衛から取次を受ける。江沢は大沢町の名主で貸家・地貸経営を生業とした。昭鳳の号を名乗った当主が文化六年段階で五四歳。江戸と往来があり、俳画狂歌越谷山人をその人と見る説がある。

こうして見ると、商品流通にともなう人的ネットワークを持ち、文化活動にも通じた人々が日護摩講に加入し札取次に関わっていたことが理解できる。時は庶民経済の成長を基盤とする化政文化がいよいよ爛熟期に入ろうかという頃。高尾山信仰の興隆もまた、時代の趨勢とともにあった。

註　代々が名に用いた同じ文字のこと。徳川氏の「家」など。

《参考文献》杉仁『近世の地域と在村文化』（吉川弘文館、二〇〇一）

八王子車人形後援会総会

三月一日（金）

八王子エルシィにおいて、八王子車人形後援会の通常総会が行われました。総会には、後援会長を務める佐藤貫首も出席致しました。

八王子車人形を伝承している西川古柳座は高尾山とも御縁が深く、節分会には、ご一門揃ってお越しになっております。

近年では国内外で公演を続けて高い評価を受け、令和四年には国の重要無形民俗文化財に指定されております。

相模原商工会議所

当山貫首講演

二月二十九日（木）

相模原商工会議所主催による「観光まちづくりセミナー～広域観光の可能性について～」が行われ、会場となった「杜（もり）のホールはしもと」において佐藤貫首による講演が行われました。

講演は「人はなぜ高尾山を愛するのか～高尾山観光の現在と未来～」と題し、高尾山の歴史や地理、そして現在に受け継がれ、また地域と連携して行われる諸行事の説明など、高尾山観光への取り組みについてお話しされました。

いちょうビジネスクラブ通常例会 当山貫首講演

三月十一日（月）

於・マロウドイン八王子

像個小孩

ゲーテ（漢訳：荒井一雄）

尋求生藝術
創建生自由
新奇生個性
孩子生尋求

厚木市　荒井　一雄

妻と子の
喪の明けやっと
溌剌と
朋の笑顔は
光り輝く

子供のように
旺盛なる探求心が芸術を生み、
深き想像力が自由を生む…
斬新なる発想は個性を生み、
自由なる創造力と
斬新なる個性を持つ子供は
更なる探求心を抱く…

「高尾山薬王院境内案内図」除幕法要厳修

三月二十一日（木）

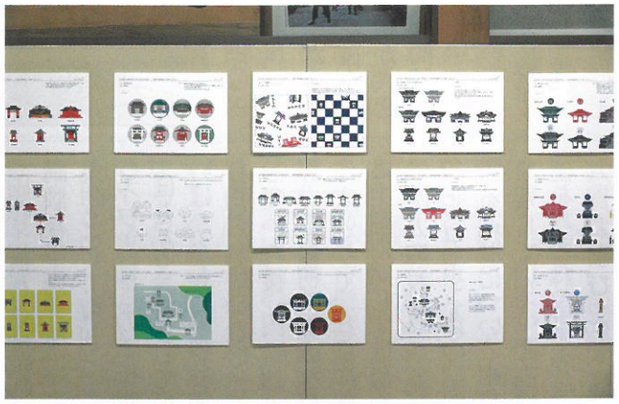
この度新たに御護摩受付所前に「高尾山薬王院境内案内図」が設置され、看板除幕式及び除幕法要が佐藤貫首導師のもと執り行われました。

この案内図の看板は、薬王院を訪れる方々に境内をよりわかり易くご案内するため、八王子市内の日本工学院八王子専門学校デザインカレッジデザイン科様に全面協力を頂き、学生の皆様が考案された境内各お堂のピクトグラム（文字を使用しない案内記号）案から選考させて頂き、最優秀作品に選出された学生の方に案内図のデザインを作成して頂きました。

当日は最優秀作品に選ばれた前迎聖実さん、優秀作品に選ばれた佐藤玲奈さん及び堀口友里さんと先生方をお迎えし、感謝状を贈呈致しました。

また、惜しくも選外となってしまった作品につきましても、四月二十一日まで、御護摩受付所横の休憩所にて全作品のパネル展を開催しております。

境内案内図の前にて学生の皆様と佐藤貫首



デザインをいただいた全作品を展示しております

東日本大震災慰霊法要厳修

三月十一日（月）

東日本大震災発生から本年で十三年を迎えた三月十一日、高尾山上において「東日本大震災慰霊法要」が営まれました。

午前十一時半、犠牲者名簿が納められている、有喜苑の東日本大震災物故者供養塔において、未曽有の大津波や震災に関連して命を落とされた方々を懇ろに御供養申し上げました。

その後、地震が発生した午後二時四十六分に合わせて、大本堂左陣祭壇において、僧侶と共に参列の皆が鎮魂と、被災地の更なる復興促進をご祈念致しました。

東日本大震災物故者供養塔においてご冥福を祈る

観音菩薩の宗教 ⑦⑥

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その14）

伝教大師最澄によってもたらされた日本天台における密教、およびそれに伴う如意輪観音菩薩信仰は、その弟子の慈覚大師円仁によってさらに充実、整備されていった。円仁は最澄同様、入唐して密教を中心とした新しい仏教を比叡山にもたらしただけでなく、その思想を後進地域であった東北にまで弘通させた。天台密教による如意輪菩薩信仰が日本各地に弘まったのも、円仁によるところが大きい。今号および次号ではこうした視点から円仁の事跡を辿ってみたい。

仏教史を見ると、偉大な宗祖の陰に隠れて看過されがちな高僧がいる。円仁などはその最たる例であろう。天台宗が今日見るような教勢を確立したのは円仁の功績が大きいし、その学的・行的基礎となった唐への留学を記した『入唐求法巡礼行記』（以下『行記』と略称）は世界史的価値が高い。しかしながらこの旅行記は、早くから研究者の注目を浴びていたわけではない。初めてこの旅行記の価値を世界に知らしめ、日本人にも円仁を再評価させたのは、駐日大使も勤めたアメリカの日本研究者エドウィン・ライシャワーであった（Edwin O. Reischauer, Ennin's Travels in T'ang China, Ronald Press Company, 1955. 田村完誓［訳］『世界史上の円仁』実業之日本社、一九六三年。後に『円仁―唐代中国への旅』講談社学術文庫、一九九九年として復刊）。ライシャワーはこの旅行記が「ほとんど読まれていないばかりか、その名前すら知られていない」ことを嘆いた後、円仁は「世界史上最初の偉大な日記作家として、さらに確かに中国に関しては最初の外国人解説者」であり、「マルコ・ポーロの記録に勝る遍歴についての業績を残している」と高い評価を与えた（学術文庫版、九頁および三六～三七頁）。現代ではマルコ・ポーロの実在や実像を疑う説すらあるが（杉山正明『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道』朝日選書、一九九五年、二〇～二一頁。フランシス・ウッド［著］粟野真紀子［訳］『マルコ・ポーロは本当に中国に行ったのか』草思社、一九九七年）、その著とされる『世界の記述』、別名『東方見聞録』の資料的価値の高さを否定する人は少ない。こうした『東方見聞録』に優る最高の資料とされたのが『行記』である。

伝存する伝記や系図によると、円仁は延暦一三年（七九四）、下野国都賀郡（現・栃木県上・下都賀郡）に生まれた。「鳴くよ鶯、平安京」の年は、円仁の誕生の年でもあった。生家は壬生氏と伝えられ、一族は土地の大慈寺の檀越であった。檀越とは施主、スポンサーをいう。円仁の父の首麻呂は大慈寺の厳堂（荘厳を施した金堂）を建立し、兄の秋主の孫・宮雄は大慈寺に観音堂を寄進したとされるから（佐伯有清『円仁』吉川弘文館、一九八九年、四～五頁）、円仁の生育環境は仏教や観音信仰と縁が深かったと推定される。円仁は九歳から十五歳まで地元の大慈寺で修行した後、大同三年（八〇八）、比叡山に登って最澄の弟子となった。その六年後の弘仁五年（八一四）、円仁は最澄を師として得度し、弘仁七年には東大寺で具足戒を受けて比丘となった。その後の円仁は東北方面への布教や、一行三昧などの難行、『法華経』『仁王経』の講説など、八面六臂の活躍をする。天長六年（八二九）には「北土」「北狄」すなわち出羽・陸奥国に巡錫し、当地で起きた地震と疫癘の救済に励むなど、理念

慈覚大師坐像。鎌倉時代（13世紀）。木造。滋賀県・金剛輪寺蔵。（『慈覚大師 円仁とその名宝』NHKプロモーション発行、2007年より）

に留まらぬ衆生済度の実践に努めた。こうした激務がたたったのか、天長十年（八三三）には、目が見えなくなるほど不調をきたし横川の草庵（後の首楞厳院）に三年蟄居したが、『法華経』の写経六千部をして恢復した。

円仁が天台請益僧として第十七次遣唐使の一行に選ばれたのは、その二年後の承和二年（八三五）のことであった。請益僧とは還学僧ともいい、日本ですでに学問を修めた僧が短期留学して学問を深めることで、二十年もの長期に亘り滞在しなければならない留学生・留学僧より格が高かった。請益僧が現代の派遣教授とすれば、留学僧はまさに留学生である。円仁はすでに天長九年（八三二）に淳和天皇より伝燈満位の僧位を授けられた高僧であったから、請益僧に選ばれたのは正統な評価であったといえよう。円仁自身も『行記』のなかで「請益法師」と自称している（承和五年八月三日の条など）。

円仁は唐に旅立つ前に、比叡山の僧たちが守るべき『首楞厳院式』九箇条を定め、女人禁制や不飲酒などを徹底するよう戒めた。円仁の出立は後顧に憂いなきよう準備万端であった。とはいえ、円仁の入唐航路は苦難を極めた。承和三年（八三六）、円仁の乗る遣唐使船が難波の津より出帆した。四二歳になった円仁の最初の渡海チャレンジである。遣唐使船は「四つの船」といわれたように、通常、四隻で出発する。円仁は遣唐大使藤原常嗣の駕する第一船に乗ったが唐に辿り着けず、第二、第四船とともに肥前の国に漂着してしまった。最悪の事態となったのは第三船で、遭難の結果、一四〇名のうち生存者は真言請益僧の眞濟と真言留学生の眞然ら二八名のみであった。『日本三代実録』によると、「船舶は破裂し、真濟は纔かに一筏に駕し、波に隨ひて泛泛然として到るところを知らず。凡そ海上に在ること廿三日、其の同乗する者卅余人、皆悉く餓死して、活くる所は真濟と弟子の真然の二人のみ。真濟、唯だ佛を是れ念じて自然に飢え死す所に非ずや」（原・漢文。佐伯前掲書、七二～七三頁）とあり、悲惨な情景が浮かび上がる。命拾いしたにも拘らず、海難を忌まれた眞濟と眞然は遣唐使一行のメンバーから外されてしまったから、もし円仁が第三船に乗っていたら「入唐求法は不可能になったはず」（同、七四頁）と推定される。遭難して生き延びた二人の真言僧は国内で活躍し、遭難しなかった円仁は入唐して天台に新たな密教をもたらした。これらが仏縁、仏の加護によるとするならば、運命の不可思議というよりほかにない。

翌承和四年、太宰府より再度出帆するが、これも漂着して失敗。円仁が唐土に辿り着けたのは承和五年六月十七日の三度目の出帆によってであった。『行記』はこの時点から起筆されている。暗行などの危殆な航海で、大使は観音菩薩を画き、円仁たち僧侶は共に読経して安航を祈った（同、六月二四日）。六月二九日の条には、「口には観音・妙見を称へて」とあるから、船中で誦した経典は『観音経』であろう。観音菩薩が水難から守る尊格という信仰は『観音経』に基づき、弘法大師の渡唐の航海でも船を守ったとされるから（拙稿「観音菩薩の宗教⑥⓪」など参照）、海上での観音信仰は代々の遣唐使船に相続・共有されていたことがわかる。難航中の『行記』の描写は迫真である。こうした苦難を乗り越え、七月二日、揚子江口に着岸した後、円仁らは揚州に到った。在唐中の円仁は「痢を患ふ（下痢を患う）」体調不良や、蚊の多さの不衛生、現地の事務手続きの遅滞などに辟易しつつも、揚州で四ヶ月に亘り最大の目的たる天台山行きの許可を待った。円仁の記述と感懐は、現代の日中の文化の不一致や衛生環境の相違にも通じ興味深い。

円仁にとり渡唐の最大の目的が天台山の国清寺訪問であったことは、揚州の役人の質問に対する円仁の回答に表されている。すなわち、「還学僧円仁　右台州国清寺に往くを請ふは、師を尋ねて、疑はしきを決するなり。若し彼の州に師なければ、更に上都に赴き、兼ねて諸州を経過せん」（『行記』開成三年（八三八）八月四日の条）とあるによる。円仁の熱望と辛抱にも拘らず、唐の役所からは天台行きの許可は下りなかった。しかしこのことが、円仁をして天台教学以上に密教、さらには如意輪観音に近づけさせた。仏縁の不可思議である。次回はそれを見る。

高尾山 季節散歩

和風月名
卯月「うづき」

四月の異名である卯月の由来は、卯の花が咲く頃であるから、または十二支の四番目に当たるからなどがあります。

その他にも異名として読み方は「うづき」で、種を蒔く時期であることから「植月」や「種月」などがあります。

今月の風物詩
真鯛

真鯛は古来より日本では、赤い体色や「めでたい」の語呂合わせから、慶祝事には欠かせない、縁起の良い食材とされてきました。

年間を通して釣れる魚ですが、特に三月から五月にかけての産卵期は特に美味であり、体色が桜色となることから「桜鯛」とも呼ばれております。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

二十七段　他人に合わせた生き方しない

他人に合わせて生きる生き方、それは誰かに認めてもらいたい、承認欲求を求めているからかもしれません。そうした生き方は時に窮屈を感じることもあるでしょう。我儘だけではいけませんが、時には自分の意見も主張してみましょう。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が参加されております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品などと交換できます。

帳面……七百円
スタンプ……百円

健康登山者投稿
高尾山の天狗さまへ

八王子市　松山　ほづみ

毎朝、笑顔の仲間にお会いできる高尾山健康登山を続けています。

しばらく前のこと。リュックにつけていた健康登山「五十八回満行」の木札を失くしてがっかりしていました。その木札が、ある日の午後、参道のちょうど目の高さの薮の中に、ちょこんと吊るされているのを見つけたのです。毎朝の健康登山では、時折り奇跡の様な美しい風景や出来事に出会うことがあります。これもきっとそのひとつ。大きなお山から、小さな木札の一片が出てきてくれた奇跡です。

誰かに聞いてほしくて、いつもお山の麓でお会いする駐車場の誘導員さんにお話ししました。すると、その日、誕生日を迎えた私に「毎朝頑張っているから、高尾山の天狗様がプレゼントしてくれたんだよ」と言ってくださいました。

嬉しくて、「そうだ～！」と笑い合いました。顔を上げると、夕方の美しい空に三日月が見えました。高尾山はいつもやさしいお山です。天狗さま（親切なお方）、ありがとうございます。

おはなし散歩道

巻機山の伝説

湯沢町　富樫　あい子

りんは、春休みに母が幸助爺に編んだ毛糸の帽子を持って越後魚沼に来た。爺は喜んで受け取った。「この頭だから、山に雪があるうちは寒くっての」

爺は、つるつるの頭を撫でながらニコッと笑った。「若草色が似合うわ。春らしくて素敵、チュウ助にもあるの。爺とお揃いよ」

「ありがとう。お母さん上手だね。りんちゃんは編み物やらないの？」「好きだけど、下手なの」顔をくしゃっとした。「好きなら巧くなるさ」チュウ助が励ました。

「爺の奥様が織る反物は上等で江戸の商人が良く買いに来たと聞いている。爺、そうだよの？だからりんちゃんも巧くなるよ」

爺は、婆を懐かしそうに、「あぁ～上手だった。昔から魚沼地域では織物が盛んでの、塩沢紬や越後上布は千二百年も昔からの日本最古の織物で『越布』としと奈良の正倉院に納められているのだ。重要無形文化財でもあるんじゃ！」爺は胸を張って話した。

「後で婆が使っていた機織機をチュウ助から見せてもらえ。倉にある」と言いながら囲炉裏端に行き炭を足した。越後の四月はまだ寒い。「チュウ助、なに山？」りんの指さす窓の向こうに残雪が溶け始めている高い山がある。「百名山の一つ巻機山だ。山で美女が機を織っていたという伝説があるんだ」

すると爺が、チュウ助に「伝説を話してやれ！」と声をかけた。りんも、「聞きたい！」

おもむろに、チュウ助は、「むか～し、昔。与作という親孝行な息子と母親がいた。ある日、母が胃の病にかかり、色々手を尽くしたが良くならない。そんな時、村の古老から巻機山に『黄連』という薬草がある。それを煎じて飲むば治ると聞かされた。「良かったね！」りんはチュウ助を見た。

「与作は、大喜びして巻機山に出かけた。しかし登れど登れど黄連はない。切り株に腰かけ思案していると、上からトンカラリン、トンカラリンと機を織る音が聞こえてきた。与作は不思議に思い、頂上を目指した。すると、小屋の中に美しい娘が鮮やかな手さばきで機を織っていた。

与作は呆然と見つめた。織り上げた娘は与作がいることに驚き「どうされました？」と尋ねた。「実は、…」と話した。娘はうなずき、その薬草のある所を知っているから、採ってきてあげます。と山へ消えていった。りんは、「何か嬉しい様な怖～い」と言い大きく息を吐いた。

しばらくして娘は薬草を手にして現れた。「私は病気の治し方を知っています。一緒に行って治してあげます」と娘の織った織物と薬草を持って山を下りた。与作が美しいい娘を連れてきたので村人は驚き評判になった。しかし、娘の介護のお陰で母親の病気も良くなり、娘は、母が織っていた機を織りながら家事を手伝い貧しかった与作の家も豊かになり、村の娘たちも機織りを習いに来る様になった。

貧しかった村も娘のお陰で豊かになった。

ある日「今日は一人でする事があるから絶対覗かないでください」と納屋にこもった。覗くなと言われて、見たくなるのが人間だ。節穴から母と与作が覗くと「アッ」声を出した。

竜の姿を見られた娘は「私は巻機山の化身です。孝行息子の母を救うために来ましたが、役目は終わりました」と涙した。

与作と母も人間の愚かさを詫びたが、その時、空が割れ雷鳴荒れ狂う中、飛竜と化して娘は巻機山へと昇天した。村人たちは、娘の織物を神として祀り、織物は魚沼の特産でもある。

（こども風土記）

（挿し絵・小出　茂）

いけばなの心 ㊿

華道教授　佐藤　宗明

今回は竹器を使用した生花をご紹介します。

池坊には竹で作られた花器が多く伝えられています。今回使用した花器は竹をくり抜いて作られる、両窓の一重切と言われる花器です。

花材は『ヒメリュウキンカ』という春に花を咲かせる植物です。和風な印象を受けますが、外来種だそうです。花材の可愛らしさがより印象的に感じられるよう、花材を器の窓の中におさめて生けてみました。

春先では地面近くに小さいお花を咲かせる植物も多く、外を歩いていても美しい花を見逃してしまうことも多いものです。いけばなを生ける時には植物が与えてくれる感動を見逃さず、また、その美しさをできる限り多くの人にわかりやすく表現する事が重要です。黄色いヒメリュウキンカのお花が外に生えている時より際立って見えれば幸いです。

花材：ヒメリュウキンカ

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

八王子市　小宮　猛
秩父市　上原　幸江
八王子市　五頭　秀山
練馬区　鈴木　雅一
八王子市　秋間　勝仁
日野市　太田　雄三
八王子市　髙野　真理子
練馬区　鈴木　紀昭
草加市　峯尾　好生
町田市　皆方　正雄
松山市　長　楽　寺
相模原市　遠藤　恵子
志木市　中野　茂宏
八王子市　黒須　隆一
〃　酒井　二三
南都留郡　中村　明智
八王子市　友井　葉子
〃　吉田　喜平
荒川区　三瓶　美智子
八王子市　佐々木美津子
三鷹市　牧戸　毅
川崎市　小宮　トシ子
富里市　森　照森
八王子市　谷合　高道
深谷市　細野　萬雄
邑楽郡　折田　成吉
中央区　冨澤　淑枝
渋谷区　金子　玲
所沢市　沖田　正太郎
目黒区　小柳　宏和
北区　黒田　静男
所沢市　土屋　信男
銚子市　川　福　寿
大田区　田中　壽治
東近江市　森島　照光
八王子市　入山　慎哉
〃　多賀谷　勝
北本市　齋藤　悦子
さいたま市　岩澤　雅昭
松本市　小林　幸平
八王子市　柴田　一郎
〃　小倉　真寿雄
小金井市　小澤　靖江
市原市　小笠　真知子
柏市　天野　久仁子
宮古市　岩木　千枝
八王子市　萩島　林七
相模原市　小林　のり子
八王子市　木原　茂
佐野市　荒居　幸子
前橋市　㈲野口組
八千代市　鈴木　健也
都留市　雨宮　宏
足立区　中山　恵司
杉並区　清水　佐
相模原市　岩橋　清美
八王子市　落合　義晴
武蔵野市　猪爪　ふみ子
潟上市　照　明寺
新座市　彰山　粧麗
小平市　関　道雄
髙尾山健康登山者一同

髙尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十一丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、一緒に巡拝いたします。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する
(琵琶滝周辺の御大師様は巡拝出来ません。
また、ケーブル代金は自己負担になります。)

日　程　五月十四日(火)

行　程　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔→本堂(護摩修行)→坊入(昼食)→一号路(下山)→不動院(献灯式・閉会式)→解散

参加費　五千円(昼食代・保険料含む)

集合場所　山麓不動院(八時半集合)

定　員　四十名　※定員に達し次第募集終了
(当山ホームページにて告知)

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。
または、ホームページ・QRコードからお申込み頂けます。その際には必要な事項をフォームに入力して下さい。

募集期間　四月十六日～五月二日(木)必着

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二二七七
大本山髙尾山薬王院　八十八大師係

※申込み後、順次行程表・詳細をお送り致します。

いろは天狗の落し文 ㊴

ゆ

夢のでかさは
心の廣さ
自分人生
迷いなく

気宇壮大という言葉があります。気前が良く、嫌なことをされても心の広さや余裕があり、スケールの大きい考えを持っているという意味です。一面では現実が見えていない人とされがちですが、夢を大きく持って迷いない人生を送ってみたいものです。

第百二十二回 信徒峰中修行会開催のお知らせ

今回の髙尾山峰中修行会は、一泊二日の行程で執り行います。初日は滝修行と回峰行、二日目は未明からの回峰行、山内諸堂参拝、柴燈護摩等を予定しております。

行程・費用・定員などの詳細につきましては、五月一日より当山ホームページにおいて告知させて頂きます。

なお、開催日程と募集期間は左記通りとなりますので、宜しくお願い致します。

開催日程　六月一日(土)～六月二日(日)

募集期間　五月七日(火)九時～
五月二十七日(月)十五時
(定員に達し次第募集終了)

登山だより

■五月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

五日、十七日、二十九日
弁天秘供

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十八日
高尾山天狗まつり

二十日、二十八日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

二十五日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十六日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
琵琶滝不動尊御縁日
奥の院開扉供養
（十時奥之院）

☆神徳報謝百味飲食供
高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。
毎月二十一日午前九時勤修
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫

ミヤマセセリ

174

蝶の仲間にはセセリチョウがいて小型種が多く、せわしなく羽ばたく姿から、その名がついたとされます。
地味なそのシルエットから蛾を思わせ、蝶と蛾の中間に位置すると考える人は多いようですが、そもそも厳密に分ける必要がなく、セセリチョウがそれを示す存在なのかも知れません。
高尾山では三～四月にかけてミヤマセセリ（深山挿蝶）が発生します。
小型の蝶ですが、翅の表面は茶褐色で後翅には黄色い紋が散りばめられなかなか高級感があります。
オスメスはよく似ていますが、メスは前翅の中央部に白い帯が入り、メスの方がより美しく感じられます。
日当たりがいい落葉広葉樹林の雑木林を活発に飛び回り、ストローのような長い口吻を使って蜜を舐め、体温が下がると林床に降りて翅を広げて日光浴をする習性があります。
本種は派手さのない蝶ですが、早春に出現するため春の使者に例えられる愛すべき存在です。

（文　松島　孝　撮影　上村　雅昭）

訂正とお詫び

先月号八ページ右下写真キャプションに誤りがありました。正しくは左記の通りとなります。

（正）　偲び
（誤）　忍び

茲に謹んでお詫び申し上げ、訂正致します。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます